

『自葉集』と伝二条為道筆西宮切

久保木 秀 夫

要旨 鎌倉時代末期の春日若宮神主、中臣祐臣の家集『自葉和歌集』は当時の南都歌壇の動向を窺わせる好資料だが、現存唯一の伝本たる宮内庁書陵部蔵本は残念ながら巻六・冬部途中までの残欠本である。一方、伝二条為道筆の古筆切の中に西宮切と呼ばれている未詳私家集の断簡（既知分は一葉のみ）があり、従来『自葉集』の散佚部分に該当するものではないかと言われていた。そこで未紹介の四葉を加え、あらためて西宮切の内容を検証してみたところ、右の従来説を補強し得るような徴証を多々見出すことができた。従って西宮切は、確かに『自葉集』の散佚部分とみてよさそうに思われる。しかも西宮切は祐臣自筆という可能性もあるようである。

ところで『自葉集』そのものについても、詞書や注記の分析によって、例えば同集が二条為世に献上されたものだったらしいなど、性格・成立・内容に関していくつか判明することがある。その他内閣文庫蔵『春日若宮神主祐春記』や、千鳥家蔵『春日若宮神主祐臣記』（の要約文）などの諸資料を活用することで、『新後撰集』の成立、あるいは正和四年の京極為兼の南都下向など、鎌倉末期和歌史に関わるさまざまな問題が浮上してくるので、併せて言及していく所存である。

和歌を能くした鎌倉時代の春日若宮神主としては、いわゆる春日懷紙の詠者の一人であり、かつその紙背に『万葉集』を書写した四代目の祐茂（祐定）が知られているが、続く五代目の祐賢（祐茂一男）以後も、神主の和歌活動は依然盛んであったとみられる。すなわち祐賢は『統拾遺集』から『統千載集』までに各一首ずつ採られている勅撰歌人であり、次の六代目祐春（祐賢一男）も『新後撰集』ほかの六勅撰集に十四首入集、のみならず彼の場合は伝自筆の詠草類の断簡もいくつか伝わり、中には二条為氏の点と評語とが加えられたとされるものもある^{〔1〕}。さてその祐春のあとに神主に任じられたのが本稿で取り上げる祐臣で、現代に続く千鳥家という家名の祖にして「歌名最も高^{〔2〕}」と言われる人物である。建治元年（一二七五）生、祐春の嫡男とも、祐春弟祐世の実子でのち祐春の養子になったともされるが詳細は不明。東京大学史料編纂所蔵『千鳥文書 二』所収「千鳥神主伝」によれば、その経歴は、

弘安二年（一二七九）十月十七日「年五而加元服」

同六年（一二八三）十二月廿三日「叙従五位下、任木工助、于時九歳」

正和二年（一二三三）八月七日「以父祐春讓補若宮神主」

同三年（一二三四）二月「叙従五位上」

元徳二年（一二三〇）三月八日「叙正五位下」

のようで、最終的には正四位下、在職三十年を経て康永元年（一三四二）神主を辞し、同年十二月二十二日に六十八歳で没、亡骸は高円山麓に葬られたという。「性廉貞居職最端正」で、神に仕える傍らに自ら好んで和歌を詠み、結果『新後撰集』（一首）『玉葉集』（一首）『統千載集』（三首）『統後拾遺集』（一首）『風雅集』（一首）『新千載集』

(一首)『新統古今集』(二首)にそれぞれ入集を果たした。しかしながら初出の『新後撰集』では「読人不知」とされ名を隠されて、それを恨んだ祐臣が、

同じ集(新後撰集)に名を隠して入り侍ることを思ひて

中臣祐臣

和歌の浦に跡つけながら浜千鳥名にあらはれぬ音をのみぞ鳴く(『玉葉集』卷十八・雜五・二四五三)と詠んだところ、これを聴いて感じ入らぬ者は無く、その評判はやがて宮廷にまで達して直ちに『玉葉集』に「入集顕名」、以後祐臣は「千鳥神主」と呼ばれ、それが千鳥家という家名の由来になったと言われる。ちなみに『新後撰集』で読人不知にされたという祐臣詠について、永島福太郎氏は根拠は不明ながら、

題不知

読人不知

花だにも惜しむとは知れ山桜風は心のなき世なりとも(卷二・春下・一二〇)という一首がそれに当たるとしている。⁽³⁾ともあれ『千鳥神主伝』に再び戻ると、もうひとつ興味深いのは「撰家集号榊葉集」と記されていることである。これを信じれば祐臣には「榊葉集」なる自撰家集があったことになるのだが、そのような作品は残念ながら伝わっていない。祐臣の家集として現在知られているのは『自葉和歌集』ひとつだけである。

『自葉集』は宮内庁書陵部本(五〇一―一八〇)が現存唯一の伝本で、都合二百三十九首を収める。その巻頭には、
自葉和歌集巻第一

春歌上

春立つ心をよめる

中臣祐臣

天の戸をいづるひかげも春日山春とや今朝はのどけかるらん（一）

とあり、以下巻二から巻六まで春歌下・夏歌・秋歌上・秋歌下・冬歌と続いていく。各巻とも最初に「中臣祐臣」と記されており、これが祐臣のいわば署名であるとおぼしき点、及び詞書のほとんどに直接体験の過去の助動詞「き」が用いられている点から、まずは自撰家集としてよいだろう。なお『自葉集』の最末尾は、

永仁三年に千首歌よみ侍りしに、時雨洩袖

^{朝旦}涙だにおきどころなき我が袖に露をかさねてもる時雨かな（巻六・冬・二三九）

同五年に百首歌よみ侍りしに（以下欠）

のように冬部の途中で途切れている。すなわち『自葉集』は残欠本とみられるわけで、そのことについて同集を初めて翻刻紹介した『桂宮本叢書』解題は「もと四季・恋・雑の一〇巻仕立てであつたらしい」としつつ、

現存本は第四〇丁紙裏一杯にまで書写され、次に白紙二葉を残してある所から推量しても、現存本の落丁散佚ではなく、すでに親本からの脱落であつたらうと考へられる。

と説いている。⁽⁴⁾

さてこの『自葉集』で特徴的なのは、所収歌の多くに「\」という合点と、「御点」「隆博卿合点」「円光院殿御点」「二条法印御房御点」「故左中将殿御点」「入庭林」といった注記が付されていることである。それらについてはすでに井上宗雄氏が、「御点」は二条為世のそれか、「二条法印」は定為、「円光院殿」は鷹司基忠とした上で「これは自詠を京の有力歌人に送って批点を求め、それを書き入れたものなのであろう」と論じている。⁽⁵⁾特に「御点」を為世のものとするという見解は、この顔ぶれからしても最も蓋然性が高そうなので、まずは従うべきであらう。なお井上氏が触れていない「故左中将殿御点」というのは、為世嫡男で早逝した二条為道のものともみられる。

また『自葉集』の内容に関しても井上氏は、

正応六年祐臣十九歳の詠歌が既に見え、この年以降、一々掲げるのは煩わしいほど五十首・百首・歌合その他を行って詠歌している。永仁二年には千首歌を詠じている。若年であるからその多くは習作的な独詠も多かったのであろうが、二年三月には人々が集まって祐春家千首を行なうなど、千鳥家歌人グループの存在は明らかに認められる。

のように述べている。その詳細についてはあとであらためて検討したいが、「とにかく熱心な歌人であった」祐臣ひいては南都歌壇の和歌活動の實際を、この『自葉集』からは垣間見ることができそう、それだけに孤本たる書陵部本が、巻六までしか伝えていないという点が、何と言っても惜しまれるのである。

二

ところで二条為道を伝称筆者とする古筆切の中に、西宮切と呼ばれる未詳私家集の断簡がある。『新撰増補古筆名葉集』為道の項に「西宮切 六半 哥二行書自詠家集歟未詳」とあるのがそれで、従来知られているのは京都国立博物館蔵手鑑『藻塩草』所収の、

(断簡A)

永仁三年に千首哥よみ侍しに

忍逢恋

をのつからしたにこゝろそとけそむる

こほりのひまのにはのかよひち (1)

同六年に左近權中将殿す、めさせ

おはしまし侍し春日社十五番の

哥合に逢恋

をのつからまところまでみるあふことも

なをゆめなれやうつゝともなき（2）

※便宜上、通し番号を歌の末尾に付す。以下同じ。

という一葉のみである。縦十六・八センチ、横十四・一センチのもと六半本で、料紙は斐楮交漉紙、書写年代は鎌倉時代の末期であろう。記載の二首は他文献には見出せず、そのため『国宝手鑑藻塩草』解説では「何集の断簡かなお明らかにし難い」とされ、同書に基づいた久保田淳氏も、

これはやはり誰かの家集であろう。しかし、誰の集か、為道の集としてよいのかどうか、全く見当がつかない。永仁六年の「右近權中將殿」も何人もいそうで、決めかねる。

とした上で「正体はわからないけれども、この詞書は永仁年間の和歌史的事実を物語っていて貴重である」と述べるに留まった。⁽⁷⁾ またその後の『古筆手鑑大成』解説では、前掲『古筆名葉集』の「自詠家集歟」という注記が重視されて、

もし推測のように「自詠家集」であるとすれば、為道の家集は伝存していないだけに、大変興味深い、貴重な切ということになる。（略、為道は）正安元年（一二九九）、二九歳の若さで没した。切の詞書に、「永仁三年（一二九五）」「同六年」などの年時が記されており、その没年と考え合わせてみると、為道自身の筆であるかどうかは別として、為道の家集であった可能性は十分にあると思われる。

という推定が明示されもした。⁽⁸⁾

そのような中、この西宮切が実は『自葉集』の散佚部分ではないかと説いたのは、またも井上氏であった。氏は断簡Aのうち1の歌の「永仁三年に千首哥よみ侍しに忍逢恋」という詞書に注目して、「これは自葉集と形式がよく似ているのではなからうか（いま散逸している恋部か）」とし、かつ永仁六年の詠である2の歌についても「自葉集であることを妨げ」ず、その詞書に見られる「左權中将こそ伝承筆者の為道ではないか」と論じた。「自葉集と形式がよく似ている」というのは、同集の例えば、

永仁三年千首歌よみ侍りしに、海霞

うづもれぬ音こそ残れなごの海や霞のしたの沖つ白浪（巻一・春上・一九）

などとの一致を指しているのだらう。言われてみれば確かにそうで、その点この井上氏の説は極めて魅力的な意見のように思われる。ただ残念なことに、結局既知の西宮切が断簡Aの一葉のみしかなかったために、それ以上の論の展開は望み得ないのが従来状況だった。

しかしながら稿者は近年、西宮切のツレとみられる断簡をほかに数葉見出しており、結論を先に言えば、それらによつて井上氏の説の蓋然性をより高めることができそうなので、以下に詳述することとしたい。ツレというのはすなわち、青蓮院旧藏手鑑『もしの関』所収の、

（断簡B）

永仁二年に名所百首よみ侍しに

恋

行すゑをたれにとはまし、のふ山

人はこゝろをゝくのかよひち（3）

忍恋の心を

みせはやな人にしられて白なみの

よるゝさわく袖のみなとを（4）

しられしな袖のみなどによる浪の

うへにはさわくこゝろならねは（5）

永仁元年に百首哥よみ侍しに

という一葉と、イェール大学バイネキ稀覯書図書館蔵手鑑所収の、

（断簡C）

しるしなくはいかゝはせんとおもひしに

いのりしまゝときくそうれしき（6）

述懷哥中に

一すちにうきをわか身のかそとは

おもひなせとも人もうらめし（7）

あらましにおもひすつるはやすけれど

けにそむかれぬよをなけくかな（8）

ゆくすゑをたのむこゝろのあれはこそ

うきにいのちを猶をしむらめ（9）

永仁二年古今哥ことに一首の哥

という一葉とである。断簡Bは寸法等未詳、「二条家為道卿」という極札を持つ。断簡Cは縦十七・〇センチ、十五・五センチ。料紙はおそらく斐楮交漉紙。極札には「二條家為定卿しよしなぐ（朝倉茂入の極印あり）」とあつて為道ではないものの、断簡A・Bと同筆同体裁たることは一見して明らかなので、西宮切と判断して差し支えないものと思われる。

さて3から9までの都合七首は、断簡A同様に他文献には検し得ない。しかしそれらの記載を調べてみると、やはり断簡Aと同様に、『自葉集』との共通点を見出すことができるのである。順に確認していくと、まず注目すべきは5と8とに「御点」という注記が付されていることで、これは前述した『自葉集』のそれ（為世のものとみられるという）と、まさに同一であると言えよう。次に3の詞書「永仁二年に名所百首よみ侍しに恋」だが、『自葉集』にはそれと酷似した、

永仁二年名所百首に、秋

いなみのあさぢ色づく秋風にゆふべをさむみうづら鳴くなり（巻五・秋下・二二三）

という詞書を持つ歌がある。また5の次に見られる詞書「永仁元年に百首哥よみ侍しに」も、『自葉集』の、

永仁元年百首歌よみ侍りし中に、名所郭公

郭公なごりもとはず鳴きすてていづちいくたのもりの下かげ（巻三・夏・一一二）

永仁元年百首歌よみ侍りしに

さびしさの今よりつらき秋もないかがたもとの露はまさると（巻四・秋上・一五九）

永仁元年百首歌よみ侍りしに、同じ心（女郎花）を

くれかかるいりひのをかの女郎花露もあらはに色をそへつつ（同一七一）

という三首のそれと合致する。さらに9の次の「永仁二年古今哥ことに一首の哥」という途中までしか知られない詞書も、『自葉集』の、

永仁二年に古今歌ごとに一首の歌よみ侍りし中に

つらしとは花もうきよをいとへばやさてありはてぬ色に咲くらむ（巻二・春下・五三）

永仁二年に古今の歌ごとに一首の歌よみ侍りし中に、夏歌

かぜそよぐみねのささやにかけもりてねざめすずしき夏のよの月（巻三・夏・一三八）

風かよふ山下みづの岩まくらよせくる浪のおとぞすずしき（同一三九）

永仁二年に古今歌ごとに一首歌よみ侍りしに、すすきを

ものおもふ袂はおなじ花すすきわが身をよそに露やおくらむ（巻四・秋上・一六九）

永仁二年に古今歌ごとに一首の歌よみ侍りしに、虫

風さむきをのの浅茅のきりぎりす霜よりさきにこゑよわりつつ（巻五・秋下・二一九）

という詞書の前半部とはほぼ同文である。このように断簡B・Cと『自葉集』とは、おそらくは同一の折とみられる詠が少なからず含まれているわけである。それが例えば一首だけとかいうことならば、西宮切は祐臣とともにその詠に臨んだ別人の家集だった、という可能性も生じてこようが、一致するのが断簡B・Cで三例、また断簡Aに関する井上氏の指摘一例の、合計四例も存するとなると、もはやそうとも判断しにくい。すなわち少なくともそれら四例については、『自葉集』所収歌と一連の祐臣自身の詠とすべきであり、加えて西宮切が私家集の断簡であるらしいこと、及び「御点」という注記を有することをも考え併せるならば、やはり西宮切は井上氏の推定どおり、『自葉集』の散

佚部分であるとみるのが適切なように思われる。

なお以上の私案を本稿に先立ち、小林強氏に口頭にてお伝えしたところ、後日これも西宮切であろうということで、高城弘一氏蔵手鑑『筆宝帖』所収の次の一葉をお示し下さった。

(断簡D)

かせさえてけさはしくれのたえゝに

わかるゝ雲にあられふる也 (10)

藪を

吹まよふ山かせさむき雲まより

御点

ひかけはみえてふるあられかな (11)

(四文字分空白) 百首哥よみ侍しに藪

冬さむみこほりてよとむたきつせに

なをたまちるやあられなるらん (12)

(二行分空白)

縦十六・八センチ、横十五・四センチ。極札には「京極黄門定家卿かせさえて
百三首 (琴山)」とあるものの、その筆蹟・体

裁が断簡A・Cと一致することに加えて、11に「御点」という注記が見られる点、確かにこれは西宮切だと認められよう。うち六行目(12の詞書)の上部には四文字分、八行目の次には二行分の空白が存するが、小林氏によれば当該部分は擦り消されているとのこと、おそらくは「定家」という伝称と抵触するための所為だろうという。詠歌年次などに関わる情報が失われてしまったのはまことに残念と言わざるを得ないが、それでも残存数の少ない西宮切の一

葉として極めて貴重であることに変わりはない。ご教示下さった小林氏、及び引用・図版掲載をご許可下さった高城氏に厚く御礼申し上げる。

また『当市東区某大家所蔵品売立目録』（大正十四年一月二十二日 名古屋美術倶楽部）なる売立目録には、「定家歌切 流れ江の 光廣卿箱」として次の一葉（軸装）が掲載されている。

（断簡E）

なかれ江のあしまかくれに舟とめて

をの、みなとに日をすこすなり（13）

同年に後撰哥一句を題にさくり

て人々哥よみ侍しにゆくもかへるも

あまをふねゆくもかへるも大□□の

た□□□まではかよふものかは（14）

旅の心を

こきいてしけさはのさかの□□□□□そ

みしまにちかくゆふ浪そたつ（15）

図版は小さく不鮮明で、筆蹟などの特徴は明確には把握したい。しかし14の「同年に後撰哥一句を題にさくりて人々哥よみ侍しにゆくもかへるも」という詞書は、『自葉集』の、

正安元年後撰歌一句を題にさぐりて歌よみ侍りしに、山は雪ふる

春きても山は雪ふる春日野にころも手さえてわかなつみつ（卷一・春上・一一）

という一首のそれと酷似しており、おそらくは一連の詠と考えられそうである。その点やはり断簡AとCと同じ理由で、この一葉も西宮切と認めてよいように思われる。また従って「同年に」とあるだけの13・14の詠歌年次は、右の一首と同じ正安元年（一二九九）だったということにもなる。

以上、新出の西宮切四葉を紹介・考察してきたが、ここで少々視点を変えて、『自葉集』現存唯一の伝本たる書陵部本の書誌を確認しておきたい。書陵部本は列帖装一帖で縦十七・五センチ、横十七・八センチの枳形本、料紙は色変わりの斐紙、紙数は全四十二丁、うち墨付きが四十丁。外題は左上方に打ち付け書きで「自葉和歌集」、見返し題「中臣祐臣詠」、内題「自葉和歌集」。書写年代は江戸前期頃で、『桂宮本叢書』解題によれば外題は靈元天皇宸筆の由である。本稿の最後にはその適当な部分の図版を載せておいたが、ここで興味深いのは一見して明らかのように、一面ごとの書式が西宮切と酷似しているということである。これはおそらく偶然の一致などではなさそうで、要するに伝為道筆の『自葉集』の残欠本（すなわち西宮切のツレ）が書陵部本の親本だったということだろう。書陵部本はその残欠本の書式に則る形で書写されたものとみられる。もっともその残欠本が、伝為道筆本そのものか、それともその忠実な模本だったのか、という点についてはわからないが、仮に前者だったとすると、伝為道筆の残欠本は少なくとも江戸前期頃までは確実に伝わっていたことになる。ならばあるいは今日においても、どこかでひっそりと眠っている可能性がないわけではなさそうで、ある日突然その残欠本が、我々の前に姿を現すのではないかと想像したりもしてしまうのである。⁽⁹⁾

三

さて、それでは断簡五葉を含める形で、あらためて『自葉集』の内容を検証していくことにする。その際まず為す

べきことは、五葉の断簡が一体『自葉集』のどの部立に当てはまるのか、ということ特定していく作業である。そこで断簡AからEまでの内容を確認していくと、まず断簡Aは井上氏も指摘しているとおり恋部だろう。また断簡Bも、その詞書と歌内容から恋部とみられる。一方断簡Cは、7の詞書に「述懐歌の中に」とあり、記載の四首も確かに述懐的な要素を色濃く含んでいるので、おそらくは雑部であると考えられる。『自葉集』の部立については、先程も触れたように『桂宮本叢書』で四季・恋・雑の十卷仕立かという推定が為されていたが、以上の断簡AからCの三葉によって、確かに恋部と雑部が存在していたということが明らかとなるわけである。それから断簡Dであるが、「叢」という題が二箇所に見え、加えて記載の三首とも冬の歌なので、これは現存本の巻六・冬部の散佚部分とみてよいだろう。問題は断簡Eで、15の詞書に「旅の心を」とあり、また三首いずれも旅の歌であるという点、どうも羈旅部とするのが適切である内容のように思われる。そうすると『自葉集』には四季・恋・雑のみならず、羈旅部もあったということになるのだが、ただ旅の歌は大きく括られて雑部に入れられることもあるだろうから、やはりこの断簡Eも雑部とみなした方がよいのかもしれない。

ともあれ以上の認定を踏まえつつ、まず『自葉集』の詞書に見られる各種の詠作・催しなどを詠歌年次別に整理してみたが、その前にもうひとつだけ、基本的な確認ごとをしておく必要がある。すなわちこの『自葉集』において、とある歌の詞書がその次以降の歌にまでかかる場合があるかないかについてだが、例えば、

永仁五年名所百首歌よみ侍しに

うちなびく煙の末も寂しきは秋のゆふべの塩竈の浦（巻四・秋上・一六二）

塩くまで干すとも袖のいかならん磯間の浦の秋の夕暮（同一六三）

などでは、一首目（塩竈の浦）のみならず二首目（磯間の浦）にも名所が詠み込まれており、おそらくはいずれも

「永仁五年名所百首歌」だったとみてよさそうである。このように二首目に詞書がない場合は、一首目のそれが及ぶと考えられるが、それでは、

嘉元三年八月十五夜に三首歌講じ侍りしに、月前風

ながむればあたりにかかる雲もなし月のよそまではらふ嵐に（巻五・秋下・二〇〇）

野亭月

すみなれしものとあるじは月なれや露もて結ぶ野辺の仮庵（同二〇一）

のような場合はどうか。ここでは一首目の「嘉元三年八月十五夜に三首歌講じ侍りしに」が、「野亭月」という詞書を持つ二首目にまでかかるか否か（つまり「野亭月」題も同三首歌中のものなのか）が問題となり、いずれのようにも受け取れるので実に厄介であるのだが、しかしながら『自葉集』にはまた、

永仁三年に千首歌詠み侍りしに、海辺七夕といふことを

逢ふことのまたも渚にうきてよるみるめも秋のこよひばかりぞ（巻四・秋上・一四九）

同じき千首歌中に、七夕

吹きかはる風の音より袖ぬれてめにみぬ秋をしる涙かな（同二五〇）

といった例がある。このうち二首目の詞書「同じき千首歌中に」からは、並んだ数首が同じ催しの詠であり、歌題だけが異なっているという場合には、そうである旨を明記するという『自葉集』の編纂態度を知ることができるだろう。従って先の三首歌などのように特に断りがない場合は、一首目とそれ以降とは切り離して考えるのが妥当ということになる。

そのような判断に基づきつつ『自葉集』の詞書を整理してみると、次のとおりとなる。

正応六年＝永仁元年（一二九三、八月五日に改元） 祐臣十九歳

- (1) 「（正応六年）宝治二年後嵯峨院御百首題にて歌よみ侍しに」…九（題「若菜」）
- (2) 「（正応六年）百首歌よみ侍しに」…五二（題「花」、御点）・二三〇（題「暮秋」）
- (3) 「（正応六年）堀河院御題にて歌よみ侍しに」…一五四（「萩」）
- (4) 「（永仁元年）百首歌よみ侍し中に」…一一二（題「名所郭公」、御点）・断簡B5の次

永仁二年（一二九四） 二十歳

- (5) 「三月、父中臣祐春連家にて題を探りて人々千首歌よみ侍しに」…四四（題「花下忘帰」、御点）・九七（題「人伝郭公」、合点・御点）

- (6) 「古今の歌ごとに一首の歌よみ侍し中に」…五三（御点）・八三（題「春歌」、隆博卿合点）・一三八（題「夏歌」）・一三九（題「夏歌」、御点）・一六九（題「薄」）・二一九（題「虫」、隆博卿合点）・断簡C9の次

- (7) 「百首歌よみ侍しに」…八二（御点・一条法印御房御合点）・一五五（御点）・二〇二（題「月」、一条法印御房御点）

- (8) 「名所百首に」…二二三（題「秋」、御点）・断簡B3（題「恋」）

永仁三年（一二九五） 二十一歳

- (9) 「千首歌よみ侍しに」…一九（題「海霞」、隆博卿合点）・二〇（題「梅移水」）・二四（題「花」）・三九（題「花」）・四五（題「古木花」）・五八・一四九（題「海辺七夕」）・一五〇（題「七夕」）・二三九（題

「時雨洩袖」・断簡A1（題「忍逢恋」）

(10) 「百首歌よみ侍しに」…六〇

永仁四年（一二九六） 二十二歳

(11) 「八月の頃、月歌百首よみ侍し中に」…一九三

永仁五年（一二九七） 二十三歳

(12) 「閏十月、名所百首よみ侍しに」…四八・一一四（題「郭公」）・一三五（題「夕立」）・一四五・一六二・一

六三・一八八（題「月」、御点）

(13) 「百首歌よみ侍し中に」…三・一五（題「鶯」）・七九（故左中将殿御点）・一〇五・一二三（題「五月

雨」）・一四〇（故左中将殿御点）・一四四（題「夏」）・一九二・二〇九（題「月」）・二二〇（題

「月」）・二三九の次

永仁六年（一二九八） 二十四歳

(14) 「三月、当座に三十六番歌合し侍しに」…八九（題「卯花」）・二三二（題「暮秋」）

(15) 「当座に歌合し侍しに」…七三（題「墻款冬」）

(16) 「左近權中将殿すすめさせおはしまし侍し春日社十五番の歌合に」…断簡A2（「逢恋」）

正安元年（一二九九） 二十五歳

(17) 「九月十三夜に、十首歌奉り侍し中に」…一九八（題「月多秋友」、御点）・一九九（題「湖上秋月」、御

点）・二〇七（題「古寺秋月」）・二二一（題「河月似水」）

(18) 「後撰歌一句を題に探りて歌よみ侍しに」…一一（題「山は雪降る」）・断簡E14（題「ゆくもかへるも」）

(19) 「六帖題にて歌よみ侍しに」…二一・六一・九〇・一七三（題「刈萱」）

正安四年（一一三〇） 二十八歳

(20) 「庚申会に」…一一三一（題「秋の暮」）

嘉元元年（一一三〇） 二十九歳

(21) 「二月の廿日あまりに、社頭の御たひたひし侍しに花の散り侍しかば」…六六

(22) 「仙洞御百首題をもちて歌よみ侍しに」…八（題「山霞」）・三三（題「花」）・五四（題「花」）・九一（題

「郭公」）・一一五（題「廬橘」）・一二九（題「蛩」）・一四一（題「納涼」）・一六四（題「秋夕」、円光院

殿御点）・一七九（題「霧」）・一八〇（題「霧」、御点）・一八四（題「月」）

嘉元二年（一一三〇） 三十歳

(23) 「正月、庚申会に」…一六（題「山霞」）

(24) 「三月の頃、花百首よみ侍し中に」…二五・二六・二九・三〇（円光院殿御点）・三二・四〇・四一・五九・

六七（御点）・六八・六九・七八

(25) 「卯月の頃、都にてよみ侍し」…九六

(26) 「百首歌よみ侍しに」…八七（題「残花」）

嘉元三年（一一三一） 三十一歳

(27) 「卯月廿日朝、大中臣泰方ともの申侍しに、郭公の鳴き侍しを互ひに初めて聞き侍よし申侍て」…九九（御点）

(28) 「五月、庚申会に」…一一三（題「聞郭公」）・一一七（題「河五月雨」）

(29) 「八月十五夜に、三首歌講じ侍しに」…二〇〇（題「月前風」）

(30) 「九月、庚申会に」…二二二（題「擣衣」）

年次未詳

- (31) 「名所百首よみ侍しに」…七(題「残雪」)・四二・七〇(題「春月」)・七七(題「藤」)・一〇七(題「杜郭公」)・一〇八(題「杜郭公」)・一六一・一七七(題「雁」)・一九〇(題「月」)・一九一(題「月」)
- (32) 「持明院殿三十首題御会題にて歌よみ侍しに」…一三(題「早春鶯」)・二二(題「庭春雨」)・一〇〇(題「聞郭公」)・一二〇(題「五月雨久」)・一三〇(題「水辺蛩」、御点)・一四二(題「樹陰納涼」、御点)・一七二(題「草花露」)・一九七(題「深夜月」)
- (33) 「六ヶ名所にて百首の歌よみ侍し中に」…八四(題「山」)・九二(題「杜」)
- (34) 「よみ侍し名所百首に」…二一二(題「月」)
- (35) 「法橋宗円すすめ侍し東大寺八幡宮歌合に」…一四(題「朝鶯」、御点)
- (36) 「法橋重拳すすめ侍し唯識論の裏の歌の中に」…三三(題「深山花」)・九四(題「里郭公」)
- (37) 「父中臣祐春連、新後撰集に入侍てのち、家に人々集まりて花契週年といふことを講じ侍しに」…三八
- (38) 「題を探りて歌よみ侍しに」…四七(題「曉花」)・二三四(題「菊」)
- (39) 「三藏院僧正範憲すすめ侍し布留社三十六首歌中に」…七二(御点)・一〇一(題「郭公」、御点)
- (40) 「鷹司の太政大臣の春日社歌合に」…七六(題「藤」)・一〇六(題「郭公」、入庭林)
- (41) 「弘長元年の御百首題にて歌よみ侍しに」…八五(題「三月尽」、御点)・一二一(題「五月雨」、合点)・一四八(題「七夕」)・一五三(題「萩」、御点)・一六五(題「秋夕」)・二二九(題「紅葉」)・二三五(題「初冬」)
- (42) 「東北院にて残花色稀といふことを講ぜられ侍しに」…八八

(43) 「秋たつ日よみ侍し」：一四六（御点）

(44) 「八月十五夜に人々題を探りて歌よみ侍しに」：一八五（題「浦月」）

(45) 「東北院にて月前露といふことを講ぜられ侍しに」：二一四（御点）

(46) 「庭の紅葉を折りて人につかはすとて」：二二五

すでに井上氏も指摘しているが、『自葉集』には正応六年（一二九三）の祐臣十九歳から、嘉元三年（一二〇五）の三十歳までの歌が収められているということが、この一覧からまずわかる。その約十年間という時期はまだ祐臣が父祐春から神主職を譲られる以前であり、そのため比較的時間に余裕があったという事情もあるのかもしれないが、それにしても毎年毎年熱心に詠作に励んでおり、若年の頃から相当和歌に打ち込んでいたらしい様子が知られる。ではこれらの催しの中で興味深く思われるものをいくつか指摘していくと、例えば(1)に「宝治二年後嵯峨院御百首題にて歌よみ侍しに」とあり、また(6)に「古今の歌ごとに一首の歌よみ侍りし中に」とあるように、祐臣は既存の作品の歌題なり所収歌なりに基づく形で詠作を実に頻繁に行っている。ほかに依拠した作品としては(3)の「堀河百首」、(18)の「後撰集」、(32)のいわゆる「嘉元元年伏見院三十首歌」、(41)の「弘長百首」などが挙げられるが、それらのうち特に注目されるのが(22)の「嘉元元年仙洞御百首」である。これは言うまでもなく『新後撰集』撰進のために召されたいわゆる嘉元百首のことを指す。井上氏は嘉元百首の詠進の時期を、乾元元年（一三〇二）の冬から翌嘉元元年の秋までだったかと推定しているが、その百首題を祐臣は、

嘉元元年に仙洞の御百首題にて歌よみ侍りしに、花

おのづから我と散るとて山桜残らばさそへ春の山風（卷二・春下・五四）

という詞書から明らかなように、すでに嘉元元年のうちに詠んでしまっているわけである。この例からは祐臣が、普

段からどれだけ中央歌壇の情勢に気を配り敏感に反応していたか、ということが実によく窺えるように思われる。

次に嘉元三年（一三〇五）の⁽²⁹⁾「八月十五夜に、三首歌講じ侍しに」という詞書だが、内閣文庫蔵「春日若宮神主祐春記」（つまり祐臣の父祐春の日記）の同年八月十五日条には、

八月十五夜、此亭一会在之、三首題、

という記事があり、その歌会の催行を裏付けることができる。この嘉元三年の記事を有する「祐春記」は、外題には「祐恣記」とあるが、そのような人物は神主中に見当たらず、加えて嘉元三年時の春日若宮神主は祐春なので、おそらく「恣」は「春」の誤りとみられる。また内閣文庫にはこれとは別に「祐春記」六冊が蔵され、「永仁四年四季」「正安三年四季」「正安四年自正月至十二月 延慶二年十二月」「応長二年自正月至八月」「正和二年春夏七八月」「徳治二年四季」という各年次を伝えている。これらの「祐春記」は井上氏も、

玉葉の奏覧月日は過去に諸説があつたが、増鏡に三月廿八日とある事、祐春記四月二日の条に「去月廿八日勅撰奏覧之間風聞南都」（以下欠文）とあり、三月二十八日が正しい事はあきらかである。

などのように数度にわたって活用しているが、このたび稿者もあらためて、小川剛生氏のご助力を得ながら読み進めてみたところ、さらにいくつかの興味深い記事を拾い上げることができた。例えば永仁四年（一二九六）八月条の、

十八日、天晴、現葉集上一卷舜堯房に借了、

十九日、雨降、自舜堯房許現葉一卷返之、又二卷借遣了、

という二条は、散佚した二条為氏撰「現葉集」⁽¹⁰⁾の流布状況の一端を示すもの、また応長二年（一三一二）三月十一日条の、

今月五日、三藏院僧正房範憲可来由被示間、罷向之处、房中晝夜前当座哥合有之、仍予判之处、御慮之判所望之

由申之とて其衆五六輩出テ、彼等前ニテ可付勝負之由被示之間、以爪點注付、

という一条は、祐春が歌合の判者をも務めることがあったという事実を伝えるものである。そしてまたそれらの中には、『自葉集』を讀解していく際に役立ちそうな記事も少なからず見出せた。そこで前掲一覽の中から、この「祐春記」と関連を持つとおぼしい詞書をまとめて取り上げてしまうと、まず(28)の嘉元三年五月に「聞郭公」「河五月雨」の二題を詠んだという庚申会だが、これは『祐春記』同年五月十五日条の、

雨降、今日庚申会奉之、頭人權預福寿大夫、題二首、聞郭公・五月雨、述懷等也、

という記事とほぼ一致し、おそらくはこの折の詠であろうと考えられる。次に(42)の「東北院にて残花色稀といふことを講ぜられ侍りしに」という詞書、及び(45)の「東北院にて月前露といふことを講ぜられ侍りしに」という詞書だが、『祐春記』正安四年（一二三〇）八月三日条には、

東北院得業御房覚円御參籠、御座所へ參了、種々雜談在之、哥物語在之、

という記事がある。この覚円というのは、西園寺実兼男で興福寺東北院の大僧正となった人物である。また京極派歌人としても知られており、岩佐美代子氏もこれまでにたびたび言及しているが、¹⁾ともあれ右の記事からは、覚円と若宮神主との間に和歌を介しての交流があったことが知られる。一方問題の(42)(45)には「講ぜられ侍りしに」とあり、尊敬の助動詞「らる」が使われているので、この時東北院で歌題を講じたのは祐臣本人ではなく、祐臣が敬うべき立場にいる、とある人物だったということがわかるが、以上のような点からすると、それは覚円であるとみてまず間違いないだろう。従つて(42)(45)に見える催しは、覚円の南都における和歌事績のひとつとして今後扱っていくことができる。それからもうひとつ、(37)の「父中臣祐春連、新後撰集に入り侍りてのち、家に人々集まりて花契假年といふことを講じ侍りしに」について、『新後撰集』の祐春の歌は、

冬歌の中に

中臣祐春

かれ行くも草葉にかぎる冬ならば人目ばかりは猶や待たまし（巻六・冬・四六五）

（恋歌中に）

中臣祐春

いとはるる憂き身のほどをしをばずはつらきたぐひも人にとはまし（巻十六・恋六・一一八三）

（題不知）

中臣祐春

散りやすき花の心を知ればこそ嵐もあだに誘ひそめけん（巻十七・雜上・一二五七）

という三首で、ここではその入集を祝して歌会を催したもののようである。この詞書にそのまま当てはまる記事は残念ながら『祐春記』には見出せないが、しかし嘉元三年三月二十四日条には、

神宮預・権預・木工助合力シテ勅撰悦事構之、哥人等来此亭了、三首題、款冬・暮春・遇恋等也、

のようにある。同年の時点ではまだ『玉葉集』は成立していないので、ここに言う「勅撰」とは問題の『新後撰集』を指しており、右の記事ではその『新後撰集』への入集を悦んでいたと考えられよう。よって⁽³⁷⁾も、おそらくはこれに近い時期、嘉元三年の春頃に催されたものと推測することができそうである。⁽³⁷⁾のその歌が、

父中臣祐春連、新後撰集に入り侍りてのち、家に入々集まりて花假年を契るといふことを講じ侍りしに

折をしり時を忘れて年ふるは春と花との契なりけり（巻一・春上・三八）

のように春の歌であり、『自葉集』でも春部に配列されていることも、春頃という季節とはよく合致すると言えるだろう。ところで『新後撰集』の成立時期について、九州大学図書館細川文庫蔵『代々勅撰部立』⁽¹²⁾には、まず正安三年（一二三〇）十一月に後宇多院から為世へ撰集下命があり、その二年後の嘉元元年（一二三〇）十二月十九日に奏覧されたと記されている。問題なのは、このように奏覧が嘉元元年十二月だったとすると、嘉元三年春頃開催の祐春の

以上『自葉集』のいくつかの詞書と、それから垣間見られる和歌史的事実について若干の考察を加えてきた。続いて今度は『自葉集』に存する合点注記に目を向けてみよう。すでに簡単に触れたように、『自葉集』所収歌の中には「／」「御点」などの合点注記が付されているものがある。具体的には、

A「 \searrow 」(合点、意図するところは不明) : 八二・九三・九七・一〇二・一二一・一三四・一八九

B「御点」(おそらく二条為世) …… 一一・一二・一四・一八・二七・二八・三四・四三・四四・五〇・五一・五

三・五六・五七・六一・六三・六七・七二・七四・八〇・八一・八二・八五・九三・九五・九七・九九・一

〇一・一〇一・一一一・一三〇・一三四・一三六・一三九・一四二・一四六・一四七・一五三・一五五・一

八〇・一八二・一八八・一九九・二〇四・二二四・二三三・二三七・二三四・断簡B5・

断簡 C 8・断簡 D 11

- C 「隆博卿合点」(九条隆博) …一九・八三・一五六・二一九
- D 「円光院殿御点」(鷹司基忠) …三〇・五五・一三四・一六四
- E 「故左中将殿御点」(二条為道) …七九・一一〇・一四〇・二〇六
- F 「一条法印御房御合点」(定為) …八二・二〇二・二二〇
- G 「入庭林」…一〇六

という七種類だが、これらは先に紹介した井上氏の説のとおり、祐臣が「自詠を京の有力歌人に送って批点を求め、それを書き入れたもの」であろうと考えられる。より詳しく言うとおそらく祐臣は頻繁に歌を詠んで彼ら在京の歌人達に詠草を送り、そうして加点された詠草を用いて今度は『自葉集』を編纂し、その際に評価を受けた歌については明示しようという意図で、「御点」「隆博卿合点」などと注記を加えていったのだろう。もともと『自葉集』内容上の年次の下限(判明する範囲では嘉元三年、前述)と、注記が付され得た時期(正和二年以降、後述)とは八年ほど間があるので、注記は『自葉集』編纂後しばらくを経てから加えられたものかもしれない。いずれにせよこれらの注記(合点はともかく)はおそらくは祐臣自身が付したものととしてよいだろうから、とりあえずはそのような前提で論を進めていくことにする。

そうするとまず注目されるのは、Dの「円光院殿御点」である。基忠が「円光院殿」と呼ばれ得るのは薨年の正和二年(一一三三)七月七日(『公卿補任』)以降であるので、この注記が記されたのは(またそれが編纂と同時期ならば『自葉集』が成立したのは)少なくともそれよりはあとと考えられよう。一方『自葉集』にはほかに、

鷹司の太政大臣の春日社歌合に、藤

夕日さす雲こそかれ三笠山同じ高嶺の松の藤波(巻二・春下・七六)

鷹司の太政大臣の春日社歌合に、郭公

^{入庭林}鳴きすつるただ一声も身にそひて心に過ぎぬ郭公かな（巻三・夏・一〇六）

のような詞書があり、ここに登場する「鷹司の太政大臣」も基忠を指すとみられる。この基忠主催の春日社歌合というのはほかに所見がないようだが、仮に「太政大臣」という官職表記が詠歌年次のものであったとすると、基忠が太政大臣となったのは弘安八年（一二八五）四月二十五日のことだから（『公卿補任』）、歌合の開催はそれ以降ということになる。ところで右の二首目にもまた注記が付されており、すなわち前掲Gの「入庭林」というものである。これはこの一首が「庭林」なるものに入集していたことを示すのだろう。「庭林」という名を持つ作品は現在伝わっていないが、冷泉家時雨亭文庫蔵『私所持和歌草子目録』⁽¹³⁾「打聞」の項には、

一 打聞

………	………
聞底抄	洞花抄
庭林集	杜壇抄
月詣集	松風集
………	………

のように「庭林集」という私撰集の名が記されているので、おそらくはそれを指すものと思われる。また福田秀一氏によつて初めて具体的に紹介された岡山大学附属図書館池田家文庫蔵『歌書目録』⁽¹⁴⁾には、

（家々撰集和歌）

庭林集

十卷

鷹司太閤家中ニ読所哥之集也

という大変興味深い記述が見られる。そうするとここで想起されるのは、有吉保氏(15)ご所蔵の未詳中世私撰集残簡である。有吉氏によると成立は鎌倉時代末期頃で、基忠周辺で編まれたものと想定されることだが、今結論だけ述べておくと、この残簡こそが問題の「庭林集」である可能性がかなり高いように思われる。先頃有吉氏の格別のご厚意により、この残簡を実地に調査させていただくことができたので、別の機会にあらためて検討したいと考えている。さて、次に注目すべきはBの為世の「御点」である。「自葉集」では計五十四首もの歌に「御点」が付されており、この数の多さからは、祐臣が実に頻繁に為世の加点を求めていたことが知られる。おそらく祐臣は為世の門弟のような立場にいたのだろう。本稿の冒頭で祐春筆・為氏加点の詠草断簡を取り上げることがあったが、祐臣もそのような父に倣って、そのような形で為世の指導を仰いでいたものとみられる。では具体的に、どのような場で詠まれた歌に「御点」が付されているのか、ということについては、前節で掲げた詠作・催し等一覧に併せて示しておいたので、そちらをご参照願いたい。今はそれらの中から、正安元年（一二九九）の⁽¹⁷⁾「九月十三夜に、十首歌奉り侍し中に」という一例だけを取り上げることにする。

この時の歌は『自葉集』には、

正安元年九月十三夜に、十首歌奉り侍りし中に、月多秋友といふことを
御点秋を経てなれぬる月の影のみぞ心かはらぬ友となりける（巻五・秋下・一九八）

同十首に、湖上秋月

御点滋賀の浦や秋はみぎはの外までもさざ浪よせてこはる月影（同・一九九）

正安元年九月十三夜に、十首歌奉り侍りし中に、古寺秋月

月ならで誰にとはましとぶ鳥のあすかの寺のよの昔を（同・二〇七）

正安元年^マ十三夜十首歌奉り侍りし中に、河月似氷

山河の岩間の月のうす氷むすぶとみればかげぞながるる（同・二一一）

のように四首見出すことができ、うち最初の二首が「御点」を有する。詞書自体はやや不明瞭で、「十首歌奉り侍りしに」とありながら誰に奉ったのかという点が明示されていないのだが、しかしながらこの「御点」の存在によって、十首歌を為世が披見していたことが知られよう。従って「奉り侍りし」というのは、祐臣が為世に直接献上したことを示すもの、と考えるのがまずは穏当なようである。なおその「奉り侍りし」の「奉る」という謙譲語は、もちろん為世に対する敬意の表明とみられるが、詞書中でこのような、他の登場人物に対する待遇表現が用いられるのは、『自葉集』ではほかに二例だけしかないようである。そのうちのひとつは、先程も取り上げた東北院の覚円に対する「講ぜられ侍りし」の「らる」という例、そしてもうひとつが西宮切の断簡Aに見られる、

同（永仁）六年に左近権中将殿すすめさせおはしまし侍し春日社十五番の哥合に、逢恋

をのつからまところまでみる逢ふこともなを夢なれやうつつともなき（2）

の「すすめさせおはしまし」という例である。この詞書の「左近権中将殿」については井上氏によって、為世嫡男の為道のことではないかと指摘されており、為道が永仁六年（一二九八）当時にそう呼ばれ得たことは確かに諸資料から類推できるので、⁽¹⁶⁾まずは従うべきかと思われる。よってこの詞書では、「すすめさせおはしまし」という尊敬語が為道に対して用いられていることになるが、それにしても「すすめさせおはしまし」というのは、覚円の「講ぜられ」という例に較べて敬意の程度が非常に高いと言えるだろう。そのことと、前掲の「正安元年九月十三夜十首歌」の詞書で為世に対し「奉る」とあった例とを考え併せると、『自葉集』では為世と為道、すなわち二条家に格別の敬意が

私われている様子が窺えるのではないだろうか。ところで『自葉集』が祐臣の自撰家集とみられることについては本稿の最初で確認を済ませたが、また詞書において「侍り」が多用されていること、のみならず十巻仕立てとされ部立が設けられ、というふうに、かなり整然と構成されていることから、『自葉集』が草稿や手控えの類ではなく、第三者に見せることを前提とした、対外的な目的のために編纂されたらしいことが見て取れよう。ではその第三者とは具体的に誰だったのかというと、もちろんいろいろと想定することはできるだろうが、前述のような二条家に対する待遇表現から推して、やはり最も有力な候補は二条家であり、またその中でも為世であろうと思われる。これはあくまで可能性のひとつに過ぎず、推測の域を出るものではないのだが、しかしそのように考えてみると、例えば『自葉集』の次のような問題に対して、それなりに納得のいく答えが得られるようになるのである。

それは先程の「正安元年九月十三夜十首歌」に関することだが、『自葉集』では基本的に祐臣以外の人物が登場する際は、

法橋宗円すすめ侍りし東大寺八幡宮歌合に、朝鶯

春風のしるべは遅き谷の戸に今朝は心と鶯ぞ鳴く（巻一・春上・一四）

法橋重挙すすめ侍りし唯識論の裏の歌の中に、深山花

かへりみる外山も花の盛りにてなほゆきやらぬみ吉野の奥（同三三）

三蔵院僧正範憲すすめ侍りし布留社三十六首歌中に

おほかたのかげやはかはる春くれば月の名立てにかすむ空かな（巻二・春下・七三）

東北院にて、残花色稀といふことを講ぜられ侍りしに

おほかたの山は青葉の色ながらそれかと残る花の白雲（巻三・夏・八八）

永仁二年三月の頃、父中臣祐春連家にて、題を探りて人人千首歌よみ侍りしに、人伝郭公といふことを

人づてに鳴くとは知りぬ郭公我が身に聞かぬ初音なれども（同九七）

のようにその名前や総称、もしくは特定できるだけの情報を必ず詞書中に記している。ところが「正安元年九月十三夜十首歌」の場合だけは異なっており、誰にこの十首歌を奉ったのかということが詞書には示されていない。為世であろうという推測は、たまたま「御点」が存していたからできたのであり、詞書の記述だけからそうと判断することはほとんど不可能に近いだろう。このように「正安元年九月十三夜十首歌」の詞書は、為世という登場人物に関する手掛かりが何も記されないという点で、『自葉集』では例外的な書かれ方となっているのである。ではなぜこれに限ってそうなのかと言うと、それは前述のように『自葉集』そのものが、為世に献上されたものだったからではないだろうか。つまり為世が目を通すことが前提となっていたために、為世の名前をあらためて記したりする必要がなかった、記さなくても十分通じた、ということだろうと思われる。またそれと同様のことは、それこそ「御点」という注記についても言えるだろう。ほかの注記が「隆博卿合点」「円光院殿御点」などと記されている中で、「御点」にだけは為世の名が冠されていないのだが、それもこの『自葉集』がほかならぬ為世相手のものだったから、ということではほぼ説明がつきそうである。

このように『自葉集』は、おそらくは為世に献上されたものだったのだろうと仮定してみたいのだが、ここでもう少しだけ論を進めると、前述のとおり『自葉集』への注記の付加（あるいは同集の成立そのもの）が正和二年以降という点は注意すべきと思われる。と言うのはそれからわずか五年後の文保二年（一一三二）十月に、『続千載集』撰進の命が後宇多院から下されているからである。その際に撰者の為世が、歌人であるか否か、堪能であるか否かに関わらず、広く人々に詠草を募ったという『井蛙抄』のエピソードは余りにも有名であるが、そうするとやはり想像さ

れるのは、その時の為世の求めに応じた人々の中に祐臣がいて、結果献上されたのが、すなわちこの『自葉集』だったのではなからうか、ということである。そのように考えてみた場合、例えば「御点」や「入庭林」といった注記の類は、自らの実績を示して、勅撰作者たり得ることを主張しようとしたものだったと理解できるし、また例えば『自葉集』における、

父中臣祐春連、新後撰集に入り侍りてのち、家にて人人あつまりて、花契週年といふことを講じ侍りしに折を知り時を忘れて年ふるは春と花との契なりけり（巻一・春上・三八）

といった歌の存在も、『新後撰集』の撰者でもあつた為世への配慮だろうと受け取ることができるだろう。もともとそうした見方にすべての要素が当てはまるわけでもなくて、例えば祐臣の歌は『続千載集』に、

題不知

中臣祐臣

知られじな袖のみなどによる波の上にはさわぐ心ならねば（巻十一・恋一・一〇九二）

（題不知）

中臣祐臣

過ぎやすき時雨を風に先だてて雲の跡行く冬の夜の月（巻十六・雑上・一七八四）

題不知

中臣祐臣

世々経ぬる跡とは人に知らるとも身にしのばれん言の葉ぞなき（巻十七・雑中・一八九四）

のように三首入集しているが、その中で『自葉集』所収歌と一致するものは一首もない。この場合、一首目は恋の歌、二首目は雑あるいは冬の歌、三首目は雑の歌であるから、あるいは『自葉集』の散佚部分にかつては存していたものか、と憶測することもできるが、しかししないものを根拠にしても説得力は得られないので、そうみることは控えたい。また例えば祐臣の歌は『続現葉集』にも、

（題不知）

中臣祐臣

秋の夜は我よりほかも飛ぶ火野の野守やいでて月をみるらん（巻五・秋下・三四五）

若宮神主になりてよめる

中臣祐臣

春日山同じ跡にと祈りこし道をば神も忘れざりけり（巻九・神祇・六八一）

のように二首入集しているが、やはりいずれも『自葉集』には見出せない。この『続現葉集』は福田秀一氏によって、おそらくは為世の撰にして『続千載集』の撰外佳作集的な性格を持つと推定されている私撰集だが、特にこのうちの一首目が秋の歌であるにも関わらず、秋部の現存している『自葉集』に入っていないということは、『自葉集』が『続千載集』の撰集資料に供されたとする見方に対して少なからず否定的に働くだろう。従って『続千載集』との関わりについては、当面はあまり想定しない方が無難であるのかもしれない。ただ可能性がまったくなくなったというわけでもなさそうなので、あえて言及してみた次第である。この問題は今後の西宮切の発掘によって、次第に明確になっていくだろう。

さて、そのほかの注記の中でもうひとつ触れておきたいのは、Dの為道の「故左中将殿御点」である。為道が没したのは永仁七年（一二九九）五月五日なので（『尊卑分脈』）、それ以降の内容を含む『自葉集』の注記で「故左中将殿」とされること自体に不審は特にない。ただそのように成立以前に亡くなっている為道であるから、当然ながら『自葉集』を目にすることも書き写すこともできたはずがなく、つまり伝為道筆の西宮切は、実のところ為道筆ではあり得ないことになるわけである。それでは一体誰の筆蹟かというところ、鎌倉末期頃というその書写年代からして、まず最初に疑うべきはやはり祐臣その人だろう。もともと現在のところ、祐臣の確実な仮名資料は見出されていないので、それに基づいた検討というのは残念ながら為し得ない。しかし祐臣を伝称筆者とする古筆切は数種類伝わってお

り、中に美保神社蔵手鑑ほかに収められている未詳私撰集断簡がある。⁽¹⁸⁾この私撰集断簡の筆蹟は勢いよく一氣に書き進められた印象で、一方の西宮切は非常に丁寧に書写された趣なので、なかなか比較は難しいのだが、それでも一字一文字の特徴はかなり通じ合うのではないかと思われる。その具体的な検証は私撰集断簡の内容の考察と併せて別の機会に行いたい。仮に両者が同筆であったとすると、私撰集断簡とともに西宮切に関しても祐臣の筆蹟だったというそれなりの可能性が生じてくるだろう。ならばまた伝為道筆とされ、しかも西宮切と同筆とおぼしき古筆切⁽¹⁹⁾についても、実際は祐臣筆だったと考えてよいことにもなる。あるいは祐臣は詠作のみならず、歌書の書写にも熱心に取り組んでいたのかもしれない。このような祐臣の、否祐臣に限らず歴代の春日若宮神主たちの書写活動に関しても、今後あらためて注意を向けるべき問題のように思われる。

五

以上『自葉集』に関する基礎的な考察を行い、またそれから派生するいくつかの問題について検討を加えてきた。最後にとある興味深い資料をもうひとつだけ紹介して本稿を締め括りたい。

正和四年（一二三五）四月、京極為兼は一族側近を引き連れて南都に下向、春日社において法華經などを供養し、併せて蹴鞠や和歌の披露をも行った。その時の為兼の振る舞いは豪奢を極めて分を越えており、結果権門の反発を招いて同年十二月の失脚、及び翌年一月の土佐配流に繋がったとされる有名な出来事であるが、従来この南都下向を伝える資料としては、『公衡公記』と『統史愚抄』のふたつが知られるばかりであった。ところが早く永島福太郎氏は、当日の記事を有する祐臣の日記が千鳥家に現存することを二度にわたって報告し、のみならずその具体的な内容をも紹介していたのだ⁽²⁰⁾。その文章を次に掲げよう。

春日社家の人々が、二条京極両家に対し、どのような態度に出でたかは未だ研究してゐない。祐春が為世に師事し、知遇を蒙つてゐることは明かである。京極為兼や冷泉為相に対しても面識はあつたらうが、それ以上の資料は見当らない。祐世や祐臣も為兼為相等に面接したことがあるが、その指導をどの程度に受けたか明かでない。唯一つ、その関係を見るのに、新資料があるので紹介して置く。正和四年四月に京極為兼冷泉為相は、鞠歌奉納の宿願を果す為に、賀茂社の禰宜等を引連れて春日社参に下向した。（鞠道に賀茂社家が加はつた早い例である）予告によつて春日社司等とともに懷紙を奉納しようとして準備をしてゐた。祐臣は折柄重服に當つてゐたので、その父祐世が詠進すべく用意してゐたところ、当日、跡に人数が定つて居るというて春日社司は除外せられ、為相が読師となつて披講した。これを祐世は残念がり、当社の披露に、その祠官が勅撰にも預る輩が洩れるといふことは不便のことだと述懐してゐる。此の時、伏見法皇・後伏見上皇の御歌も進められ、為兼の懷紙は特に絶品であつたといはれて居る。（正和四年祐臣記）これを見ると、京都の歌道家の人々からは、春日社司の如きは単に一巧人として遇せられてゐた程度と考へられる。従つて春日社司が、二条京極両派のいづれかに立つて、論争にまで加つたことはなかつたと見られるのである。

日記の原文引用が一切ない要約文で、その点極めて残念であるが、しかし歴代の春日若宮神主の日記群を長年にわたつて調査・研究していた永島氏の手になるもので、まず大枠では信頼してよいのだらうと思われる。ではこの要約文の一体どこが興味深いのかというと、例えば為兼の春日参詣の宿願というのが、具体的には蹴鞠と和歌とを奉納することであつたこと、また為兼と並んで冷泉為相の存在も大きく取り上げられていること、さらに為相が和歌披講の読師であつたことなども、もちろん見逃すことはできない。ただ本稿の関心からすると最も注目されるのは、當時神主だつた祐臣の代わりに詠んだ叔父祐世の奉納和歌が、すでに定員に達しているからといって不要とされたとい

う点である。『新後撰集』『玉葉集』に各一首ずつ入集という勅撰歌人でもあった祐世にとって、この一件は大変な屈辱だったに違いない。また祐臣にしても、それは神主がないがしろにされたのと同じことだろうから、やはり相当不快に感じたことだろう。為兼が春日大明神に一方ならぬ信仰を寄せていたことは、すでに岩佐美代子氏が指摘しているが、⁽²²⁾しかしそうした尊崇の念は、春日大明神に仕える人々にまで及ぶことはなかったようである。永島氏もこのことから、右の傍線部のように「京都の歌道家の人々からは、春日社司の如きは単に一巧人として遇せられていた程度と考えられる」と説いている。ただ「京都の歌道家の人々」と一口に言っても、為世をはじめとする二条家の人々は本稿でみてきたとおり、祐春・祐臣ら春日若宮神主との関わりを決して疎かにはしていなかった。すなわち以上のことから、京極派以外の歌人にはほとんど関心を寄せようとしないうえ、包容力のある二条派というそれぞれの在り方が、かなりはつきりと浮かび上がってくるのではないだろうか。鎌倉末期の和歌史を考察する際に、京極派の主要歌人、二条派の主要歌人を中心に据えて検討していくことは、もちろん何よりも重要であるが、また時には祐臣のような、他への影響力があまりあつたとは言えない一歌人の資料を追っていくことによっても、当時の歌壇状況の一面面を垣間見ることはできるのだろうと思われる。

〔注〕

(1) 春名好重氏編著『古筆大辞典』（昭和五十四年十一月 淡交社）のうち「中臣祐春詠草」の項参照。

(2) 永島福太郎氏『奈良文化の伝流』（昭和二十六年二月 目黒書店）。

(3) 注2に同じ。

(4) 宮内庁書陵部編『桂宮本叢書 私家集八』『自葉和歌集』解題（昭和三十三年三月 養徳社）。

- (5) 以下井上氏の説は「中世歌壇史の研究 南北朝期」（昭和四十年十一月初版 昭和六十二年五月改訂新版 明治書院）に拠る。
- (6) 京都国立博物館編「国宝手鑑 藻塩草」解説（昭和四十四年五月 淡交社）。
- (7) 久保田淳氏「手鑑の複製本から」（『和歌史研究会会報』第六十九号 昭和五十四年二月）。
- (8) 古筆手鑑大成編集委員会編「古筆手鑑大成 第四卷 藻塩草」解説（昭和六十年一月 角川書店）。
- (9) なお宮内庁書陵部蔵の柳原紀光編「歌書類目録」（柳一八三二）中「御集並家集」項には「中臣祐臣歌 一冊^冷」という記述が見られ、これは「自葉集」を指すかもしれない（既述のとおり書陵部本「自葉集」の見返し題は「中臣祐臣詠」）。そうすると「中臣祐臣歌 一冊^冷」の「冷」は「冷泉家文書目六」の略号であるから、とある時点で「自葉集」は冷泉家に伝来していたことになるうか。その冷泉家本が実は問題の伝為道筆残欠本であったりすれば、今後の出現にさらなる期待を抱けるのだが。
- (10) 福田秀一氏「中世私撰和歌集の考察 現葉・残葉・統現葉の三集について」（『文学・語学』第十六号 昭和三十五年三月）。
- (11) 岩佐美代子氏「京極派歌人の研究」（昭和四十九年三月 笠間書院）。
- (12) 「九州国文資料影印叢書（第二期）六 代々勅撰部立 神祇和歌 連歌新式」（昭和五十六年五月 九州国文資料影印叢書刊行会）。
- (13) 「冷泉家時雨亭叢書 第四十卷 中世歌学集 書目集」（平成七年四月 朝日新聞社）。
- (14) 福田秀一氏「訪書報告―岡山地区の近況」（『和歌史研究会会報』第二十二号 昭和四一年五月）。なお拙稿「岡山大学附属図書館池田家文庫蔵「歌書目録」翻刻」（『調査研究報告』第二十二号 平成十三年九月）で全文翻刻を試みた。
- (15) 有吉保氏「中世散佚私撰集の残葉紹介」（『和歌史研究会会報』第百号 平成四年十二月）。
- (16) 例えば「永仁元年内裏御会」の「正四位下行左近衛権中將臣中宮権亮美濃権介臣藤原朝臣為道上」、「尊卑文脈」為道の「左中將（略）永仁七五五卒^{廿九}」など。
- (17) 注10に同じ。
- (18) 「古筆手鑑大成 第十四卷 手鑑（京都・観音寺蔵）」四九（平成六年八月 角川書店）・「同第十五卷 手鑑（島根・美保神社蔵）」二四二（平成七年七月 角川書店）・「細川家永青文庫叢刊 別巻 手鑑」二七三（昭和六十年二月 汲古書院）・久曾伸昇氏「私撰集残簡集成」五七・五八（平成十一年十一月 汲古書院、ただし五八の方はツレかどうか存疑）など。
- (19) 「徳川黎明会叢書 古筆手鑑篇二 霜のふり葉」（昭和六十一年二月 思文閣出版）所収の「千載集」断簡、また小林強氏が初めて紹介・考察した御所本「和漢兼作集」散佚部分の断簡（『中世古筆切点描―架蔵資料の紹介―』（『仏教文化研究所紀要』

第三十六集 平成九年十一月）など。なお後者の新出のツレが『林家旧蔵古筆手鑑』（東京大学史料編纂所蔵写真帳）に一葉ある。詳しい考察は別稿に譲るが、この御所本『和漢兼作集』というのも実は『白葉集』とほとんど同じ伝来の過程を辿っていると思われる。

(20) 永島福太郎氏『春日杜家日記』（昭和二十二年十一月 高桐書院）・同氏『中世文芸の源流』（昭和二十三年五月 河原書店）。なお以下の引用文は後者に拠る。

(21) 『春日杜家日記』の方の要約文では「祐臣」としており、おそらくはこちらが是。

(22) 岩佐美代子氏『京極派和歌の研究』（昭和六十二年十月 笠間書院）。

【付記】

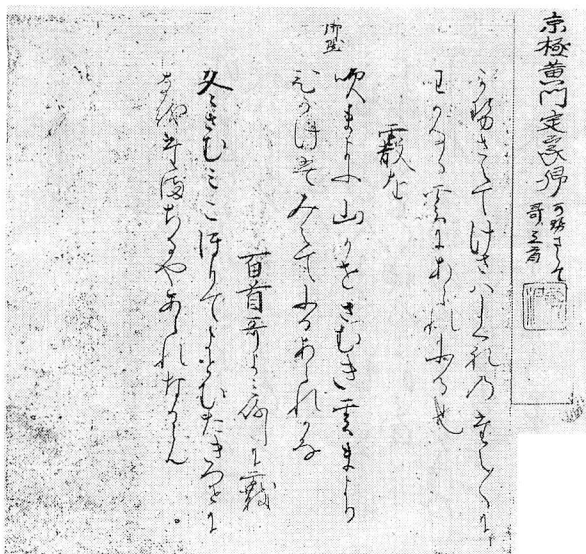
本稿は、平成十三年度和歌文学会七月例会（於立教大学）における口頭発表をまとめたものである。成稿までの間に種々ご教示下さった先学諸氏に厚く御礼申し上げる。またイェール大学バイネキ稀観書図書館蔵手鑑の閲覧に際しては、同大学図書館イースト・アジア・コレクション部長（当時）の金子英生氏、同大学教授のエドワード・ケイメンズ氏、同大学院生のクリス・ラットクリフ氏、ジェームス・バスキンド氏、タケシ・ワタナベ氏、同大学アートギャラリー学芸員の大木貞子氏の多大なるご協力を賜った。記して深謝する次第である。なお本稿は、平成十三年度科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「散佚歌集に関する古筆資料の調査・研究」に基づく研究成果の一部である。

二條家為道卿
 永仁三年、名前百首より、
 人、
 思、
 永仁元年、百首より、

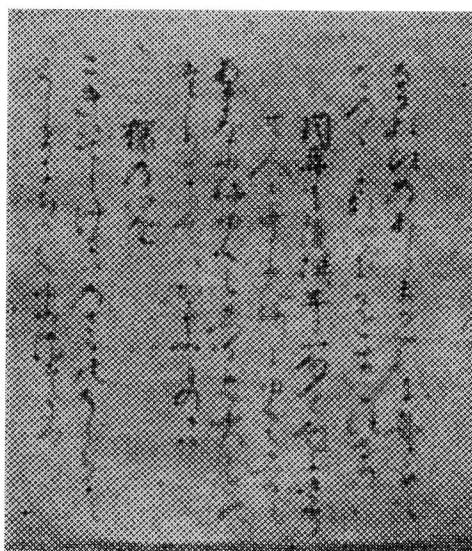
西宮切・断簡B（青蓮院旧蔵手鑑『もの関』所収）

二條家為道卿
 永仁三年、名前百首より、
 人、
 思、
 永仁元年、百首より、

西宮切・断簡C（イエール大学バイネキ稀観書図書館蔵手鑑所収）



西宮切・断簡D（高城弘一蔵手鑑『筆宝帖』所収）



西宮切・断簡E（『当市東区某大家所藏品売立目録』所収）

